

おいでませ、山口国体！を振り返って（2011. 9. 12～13）

今年の山口国体は、9月9日から11日（飛び込み競技）に広島県総合屋内プールで行われた。さる3月11日の東日本大震災の復興支援大会として位置づけられた。みないよいよ来たぞ。という感じで緊張の色が隠せなかった人もいた。今年、中国ブロックの選手の活躍は目を見張るものがあった。その締めくくりとして中国ブロックの総力戦になった。（でもほとんど広島、山口の方々のご努力だと思っています）大会は飛び込み競技だけの開催とあってはじめは「大丈夫かな」「盛り上がるのかな」などという心配があった。最初の試合は盛り上がりには欠けたと思う。そこでBGMをかけることにした。それをかけることによって選手が集中するところ、リラックスするところが観客にもわかって観客席と一体となったので非常に盛り上がった試合になった。やはり競泳とは別に実施することが望まれる。ざわついて良いところ、静まりかえったところがはっきりして良い。今後ともこういう試合を望む。それからインタビューがあって選手の声が聞けて良かったと思う。そのインタビューにも東北大震災に関する話を聞いてもらって復興支援大会としての一役を担った。

監督会議の席で日水連副会長の青木剛氏の言葉のなかに「飛び込みがメダルをとるためにはコーチ一人ひとりの意見をまとめる必要がある」「補助、支援というのは誰も弱いところにはしない。強いところにする。」「練習環境がガラッと変わる」という事を言われていた。まさにその通りだという気がした。日本の飛び込み界が岐路に立たされているといっても過言ではない。日水連は飛び込み委員会がコーチの意見を吸い上げ一つにまとめるようにリードして行ってほしい。コーチ会議とかがあるのでその場で若いコーチに指導法とかを発表してもらい、その後討論するとか。何かが変わっていく必要がある。

宮本基一郎君からメールが来た。「おめでとうございます。先生の国体30回出場記念にふさわしい成績を元樹がとってくれました。世界水泳メンバーを抑えての3位はすごい！ありがとうございました。」というものだった。私も今は亡き堀田監督のあとをついで国体に参加すること30回。30回の表彰式が10月1日山口で開かれるという事を電話で教えられた。成年男子飛び板飛び込みで鳥取県代表の安永元樹がミラクルダイブを連発してくれて5本目まで72点以上の飛び込み演技であった。最終飛び込みは5337dで83点を出して、まさにミラクルボーイとなった。彼の素晴らしいところは、スイッチの切り替えである。試合に立ち向かっていくためのスイッチである。彼が小学生の時、1mのリバースが飛べないと言って飛び込みの練習に、「もう絶対行かん」と言っていた。少年は見事に成年へと脱皮していった。

山口県にはプールがない。でも人情味があふれている。広島に役員としてきて一生

懸命に働いておられた。競技の他にも人間としてのコミュニケーションが保たれている。
今後中国5県として大会を盛り上げてほしい。プールがない山口。頑張れ。

最後にこのことを見守っておられた、今は亡き山口県水泳連盟の水球担当で飛び込み韓国遠征にも帯同された澤田先生に山口国体飛び込み競技が成功裏に終了したことを報告して、本大会まであとわずかひと踏ん張りも、ふた踏ん張りもして頑張っていくことを告げておきたい。合掌。

P S

9月16日午後9時45分、栃木県の馬場内登志絵さんが亡くなりました。また一人飛び込み競技を愛していた人がいなくなった。彼女が残したものは何か。それは山口国体で活躍した、上野大助選手や榎本遥香選手という若い力である。彼らだけではない、みな飛び込み競技が競技として存在するのは彼女の力が一助となっていることを知っている。四月の国際選手選考会の際、すでに「腫瘍ができています。」とか「この大会が終わると同時に病院へ行って検査するんです。」と教えてくれた。その時は本当に病気なのかなと思うほど元気であった。今考えると「本当に苦しかったろうな」「怖かったんだろうな」とつくづく思う。これからの選手である、榎本選手が大成していく姿を見せてあげたい。これからの日本の飛び込み競技の姿を見せてあげたい。でもきっと見ていてくれるであろう。
(2011. 9. 22)